



J-POPのコトバを変えた歌

対談

スージー鈴木
(音楽評論家)

田家秀樹
(音楽評論家)

半世紀以上にわたり音楽の現場取材しつづける田家秀樹氏。時代背景をふまえた楽曲の分析、考察に定評があるスージー鈴木氏。世代の異なるふたりの音楽評論家に、「のちの日本のポップスやロックに多大な影響を与えた歌詞」のお題で対談していただいた。

(「5曲+重なった場合の予備1曲」をリクエストしましたが、重ならなかったので全12曲をお届けします)

岡林信康に「神を見た」

田家 スージーさんは1980年代以降の歌から選んでくると思ったので、僕は70年代に絞って選曲しました。歌謡曲は戦後、レコード会社専属の作曲家、作詞家、歌い手の分業で作られていた時代があり、60年代になると岩谷時子さんや永六輔さん、青島幸男さんといったフリーの作詞家が登場します。でも、そういう職業作家の詞と、70年代に台頭したシンガー・ソングライターの詞は明らかに違った。

60年代後半に流行したGS(グループサウンズ)の歌詞は「恋と青春」なんです。でも、岡林信康さんに代表される関西フォークの人たちはそうじゃなかった。人生を、政治を、戦争を、世の中を、差別を歌った。あの時代、僕らが日々思っていたことが歌になってるんだっていう共感がありました。

スージー 田家さんの1曲目、岡林信康の「私たちの望むものは」(70年)の歌詞は、1番と2番で全く反対のメッセージになるじゃないですか。1番では「私たちの望むものは/あなたを殺すことではなく(中略)あなたと生きることなのだ」と割とわかりやすいヒューマニズムを

歌っていますが、2番ではそれを裏返して、「私たちの望むものは/あなたと生きることではなく(中略)あなたを殺すことなのだ」となる。ベトナム戦争などの背景があったにしても、こんな歌詞、後にも先にもないですよ。発表時はびつくりされたんじゃないですか?

田家 でも、それが当時のリアリティだったんですよ。一つの歌の中にある逆説のリアリティ。自分が生きることが相手を殺すことに繋がるといいう時代でもあったんです。追い詰められた中で自己回復みたいなことをどう歌うか。それを「私の」という自分だけの歌にせず、「私たちの」というマニフェストにした。これはもう歌詞じゃないでもんね。

スージー マニフェストですよ。リアルタイムじゃない世代として知りたいのは、これだけの強靱なメッセージを放っておきながら、吉田拓郎にバトンを渡すような形で、わずか1年後に表舞台から姿を消すじゃないですか。岡林信康に何があったんだ?

田家 ある種、尾崎豊と同じですよ。図らずもカリスマになってしまったけれど、受け止めきれなかった。それを否定しようとして逃げちゃったっていうパターンでしょうね。スージー 勝手に歴史を振り返ってワクワクす

るのは、岡林信康の後に吉田拓郎が「イメージの詩」でデビューした70年はまだ戦後25年ですよ。当時の40代や50代は軍隊にいた経験がある。そんな中で戦後生まれの若者が髪を伸ばして、「古い船をいま動かせるのは/古い水夫じゃないだろう」と歌った。それはインパクトあるというか、失礼ですよ(笑)。

田家 団塊の世代の世代論の一つは、お手本がないということ。上の世代は軍歌と文部省唱歌、天皇や大日本帝国憲法の中に自分の青春があったわけでしょう。戦後はその全否定で始まりましたからね。

スージー 戦後生まれの若者が自分の言葉とメロディーで歌い出したときに、当時の戦争経験世代がどれだけ「ふざけんな」と思ったか。フォークソングはそれぐらい革命的なものだった。その象徴が岡林信康である気がします。

田家 岡林が背負いきれなくなったものを吉田拓郎が背負わざるをえなくなった。拓郎さんは「この生意気な若造が」って散々叩かれました。スージー 私が戦争を体験した中年だったら腹立ったと思いますね。

田家 拓郎さんだけじゃなく、当時の若者はみんな上の世代を怒らせてましたよ。はっぴいえんどもそうでしょうし。